

かえ  
お帰り、ウェッバー！



ケロケロ、ケロケロ！  
「カエルの 鳴き声だ！」と、  
ジッピーが 言いました。



「ウェッバーが 旅から もどって 来たのかもしれないよ。」と、ジッピー。  
「そうだといいね。ずいぶん 長いこと、るすしてるものね。ぼくの こうらの  
うえ た 上に 立ってごらんよ。何か 見えるかもしれないよ。」



ジッピーはつま先で立ち、小さな首を一生けん命伸ばして、ガマの向こう側を見ようとしました。

鳴き声の元がどこか、ジッピーが池を見渡しながらさがしている間、トラッジは池のほとりを下りて行きました。すると、とつぜん・・・ケロケロ、ケロケロ！



「あーっ！」よろけたジッピーはさけびながら、トラッジの背中から落ちて、池のほとりに生えている草むらの中につっこんでしまいました。



ジッピーがトラッジの背中にまたよじ登ろうとしていると、2つの大きな目がこちらを見えています。「ウェッバーなの？」  
「そうだよ。ぼくだよ！」と、ウェッバーが答えました。



「おどろかせちゃったかい、ジッピー？」 ウェッバーが たずねました。  
「そんなことはないよ！ 別に、びっくりは・・・ちょっとだけしたけどね。」



ウェッバーは <sup>おお</sup>大きな カエル口で にんまりと <sup>わら</sup>笑いました。「家に <sup>いえ</sup>帰れて、  
うれしいよ。君たちに <sup>きみ</sup>あいたかった。」  
「泳ぎたい？」と、トラッジが たずねました。  
「いつでもさ！」と、ウェッバー。



ジッピーが一言も言わないうちに、トラッジとウェッバーは水の中に  
飛びこんで、池の真ん中に向かって泳いでいました。

「待ってよー！」ジッピーが大声を上げました。

ジッピーは池の周りを見渡して、小枝と大きな葉っぱを拾ってきました。  
水ぎわに立つと、葉っぱを水に浮かべました。



ジッピーは葉っぱの上のうえのこえだのこえだには乗うり、小枝をオールにして、ウェッカーとトラッジのいる方向へほうこうこぎました。

(泳げないのはめんどうだなあ。トラッジと水遊びする時はいつも、ぼくが泳げないことをわすれちゃうんだよね。)と、ジッピーは思いました。



するととつぜん、今までおだやかだった池に、波が起きました。それでジッピーの葉っぱの小舟がゆれたかと思うと、今度は冷たい波が頭にかかって、小枝が2本とも、流されてしまいました。「助けて！ 助けて！」と、ジッピーがさげびました。

ところが、トラッジとウェッバーには聞こえません。遊びに夢中なのです。

「ぼくは、君よりも大きな水しぶきをあげられるぞ。」 ウェッバーは  
トラッジにチャレンジしようと、丸太の上から飛びおり、体をボールのように  
丸めて大きなしぶきを上げながら、水に飛びこみました。



トラッジとウェッバーは二人とも、大笑いしました。

トラッジとウェッバーが毎回相手の水しぶきよりもっと大きな水しぶきを  
上げようとするので、波はどんどん大きくなっていきます。かわいそうに、  
ジッピーはやっとの思いで、水に浮かんだ葉っぱのふちにつかまっていた。  
そして、とうとう・・・



バツシャーン！

トラッジとウェッバーが、二人いっしょに今までよりもさらに大きな水しぶきを  
あげました。それで、ジッピーは葉っぱからふっ飛ばされて、水の中に落ちてしまいました。

「助けて！」 ジッピーは金切り声を上げました。無我夢中で手足をバタバタさせて  
浮かぼうとしましたが、すぐにしずんでしまいました。ジッピーはこわくなって、祈りました。  
「神様、助けてください！」





ちょうどその時、ジッピーはさっと水から引き上げられました。  
何が起きたのか分からないまま、いつのまにかジッピーは池のほとりに  
すわり、せきこんで水をはき出していました。



ウェッバーのお姉さんのラナが、ジッピーを助けてくれたのです。  
「トラッジ！ ウェッバー！ もうちょっとで友だちがおぼれる  
ところだったのよ！」 ラナは陸から二人に向かって大声で言いました。  
トラッジとウェッバーは、あわててジッピーのもとに泳いできました。

「どうしたんだい？」  
陸りくにああがると、トラッジが  
たずねました。

ジッピーはおこった顔かおを  
して二人ふたりに背せを向むけました。

「二人ふたりとも、ぼくは  
置いてきぼりじゃ ないか！  
おおおおええ 大声いっしょうで よんで、一めい生めいけん命  
おお追おいつおこうおとしたのに。」と、  
ジッピー。



「ぼくたち、ゲームをしたんだ。」と、ウェッバー。  
「分わかってるさ！ もしラナが助たすけてくれなかったら、ぼくは  
どうおちなおちったおちと思う？」 おこったジッピーが言いいました。

「本ほん当とうに ごめんよ、ジッピー。ぼくたち、君きみが泳およげない こと、わすれてたよ。」  
と、トラッジ。

「次つぎからは、もきとき気きをき 付つけるよ。ゆるして くれるかい？」と、ウェッバーも  
言いいました。



ジッピーはため息をつきました。「もちろん、ゆるしてあげるさ。  
君たちは友だちだし、親友だからね！」  
ジッピーは友だちにびしょぬれハグをしました。



「この次は、君もいっしょにできることを考えるよ。」ウェッターがジッピーに言いました。

「やさしいね。だけど、君たちがいっしょに泳ぐのはかまわないよ。だって、君たちは泳ぐのが大好きでしょ。たぶん、この次は、ぼくもちがうことを考えるよ。君たちの後を追って水に入る代わりにね……。本当にこわかったもの！ 神様が守ってくださったことを感謝するよ。」



「助けてくれてありがとう、ラナ!」と、ジッピー。  
 「どういたしまして。」 ラナは、兄弟とそっくりなカエル口で  
 にんまりと笑いました。  
 「たぶん、泳ぎ方を教えてあげられるかも。」と、トラッジ。  
 「それはいいかもね。ありがとう、トラッジ。」

よん なかま わら あそ もり なか はい  
 4ひきの仲間は、笑ったり遊んだりしながら、森の中へ入って  
 い 行きました。かれらはおたがいのことをもっと思いやることを学び、  
 よ ともだち  
 より良い友達になりました。



このシリーズの他のお話「トラッジとジッピー」と「ちがいは  
 あるけど仲間だよ」と「キジーとバグルとはちみつ」も、ぜひ読んでね。